

難病ALSのコミュニケーション 支援装置を作って

全身の筋肉が衰える難病、筋萎縮性側索硬化症(ALS)。しゃべる能力も失う患者のコミュニケーションを支援する技術者を、宮城県内の患者会が募っている。パソコンとインターネットを利用し自ら発信する患者も増えているが、その操作スイッチ作りは専門技術を要し、ボランティアは現在、たった一人。患者会は近く説明の集いを催し、志ある人の名乗りを待つ。

宮城の患者会呼び掛け

「患者同士で交流した スイッチを用い、今は脳い」「パソコンで通信し 波の変化をとらえ音を出したい」。日本ALS協会 出す装置で意思を伝え宮城県支部長の和川次男 さん(五七) 仙台市泉区 。

ALS患者の希望にこがんな思いをかなえた たえ、これらの工夫、改のは十五年前だ。偶然出 良を引き受けてきたのが会ったボランティアの技 同市泉区の坂爪新一さん術者に、わずかに動かせ (三三) 元東北大極低温科 た手の指を使うスイッチ 学センター助教役 。

筋肉の衰えが進むにつ ったことから「専門知識れ、和川さんは、まゆげ を生かし重度身障者の意やまつげのかすかな動き 思伝達を助けよう」と思を光センサーで感知する い立ち、ボランティア活

後継ボランティア募る集い 22日 仙台

動を続けてきた。脳卒中 医療連絡協議会の助成が 者」と訴えていた。ALS協会泉支部は、先は同県内と一関市内の 百数十日を数え、坂爪さん は「年齢や体力の問題 六年前に同県神経難病 もあり、一日も早く後継 援ボランティア募集の集いを二十二日、仙台市内で予定。参加してくれる有志に坂爪さんの活動を説明し、在宅療養をしながらネットで自立支援を訴えている患者、家族も当事者の願いを語る。



ALS患者の和川さん夫妻と、コミュニケーションの技術支援をしている坂爪さん(右) 仙台市泉区

「団塊世代が地域に戻り始めた時。経験や知識があり、日中に動けるといふ人が来てくれれば。ALSのこと、少しの手助けで社会につながれる人たちのことを知ってほしい」。和川さんの妻は つみさん(五七)は話す。集いは、仙台市青年文化センター・エックホールで午後1〜4時。応募の問い合わせ先は、事務局022(377)2598(ファクスとも)。